



# 菅原伝授手習鑑 車曳の場

豊川歌舞伎保存会(中津川市)

おくだ健太郎 氏

時は後醍醐天皇が治める平安時代。菅丞相(菅原道真)の所領、河内の佐太村で三つ子が生まれます。それを聞いた菅丞相は、自らの好きな木にちなみ、松王丸、梅王丸、桜丸と名付けました。その後、松王丸は藤原時平、梅王丸は菅丞相、桜丸は斎世親王に舍人として奉公することになりました。左大臣の藤原時平は、右大臣の菅丞相を陥れようと画策し、菅丞相は無実の罪で大宰府へ流罪となります。

演目はここから始まります。左大臣時平の陰謀により、菅丞相、斎世親王は失脚させられ、主人を失った梅王丸と桜丸は浪人となってしまいます。都から近い吉田神社にて梅王丸と桜丸がたまたま出会います。桜丸は、自分が菅丞相流罪の原因を作ったことを悔み切腹を覚悟しているが、もう少しで父の七十歳の賀の祝が済むまでは留まっていると語ります。梅王丸は菅丞相の奥方の行方が分からず、筑紫へ探しに行こうかと悩んでいたが、父の賀の祝も近いのでどうしたらよいかと語ります。そこへ敵の時平の牛車に襲い掛かりますが、一人の前に立ちはだかったのは時平に仕える三つ子の兄弟松王丸。三人は牛車を挟んでもみ合いになります。その時、牛車の中から怒る時平が姿を現します。凄まじい威厳を放つ時に梅王丸と桜丸はすくみ上つてしまします。その様子を見て松王丸は二人を斬ろうとしますが、時平は神聖な境内を血で汚すこと嫌い、また、松王丸の忠義に免じてと二人の無礼を許します。

三兄弟は、父親の賀の祝が済んだ後に決着をつける約束をし、その場を後にしました。

## 富士三桟孝子菅由比ヶ浜の場

由比ヶ浜の場

東野歌舞伎保存会(恵那市)

伊豆に流された源頼朝には、伊東入道祐親の娘の間に三歳季と海老名軍藏は、十一歳の兄一満と九歳の弟箱王を連れ出して、由比ヶ浜で番場忠太に処刑させようとなります。そこへ兄弟の母の嫁ぎ先の義父曾我太郎祐信が現れ、兄弟の介錯を買って出ます。しかし、祐信一人で兄弟を切れず、景季と祐信の二人が刀を構え、いざという時、赦免状を持つて畠山庄司重忠が駆けつけます。重忠の懸命な説得による頼朝の温情に、危うく一命を救された曾我兄弟は、喜んで義父と一緒に難を除こうと夜討をかけました。

からくも逃れた頼朝は、平氏に謀反の旗上げの戦のなかで祐親を捕らえ、斬首にしました。左衛門尉となり伊東を賜つた工藤一郎祐経は、先年自分が討つた河津三郎の遺児が祐親の孫であることから、将来の禍根を絶つようと讒言しました。

演目はここから始まります。工藤の命を受けた梶原源太景季と海老名軍藏は、十一歳の兄一満と九歳の弟箱王を連れ出され旅立っていきます。義経は嵐に遭い、船を住吉浦に吹き上げられ、吉野の川連法眼の館に匿われています。静御前は義経が吉野山にいると聞き、佐藤忠信を供に吉野山へとやって来ます。二人は桜の木の下で鎧と初音の鼓を取り出し、義経を偲びます。忠信は、こうして鎧を賜ったのは兄・継信の手柄のおかげだと、壇ノ浦の物語を静御前に語つて聞かせます。平家の大将能登守教経が義経を狙つて射た矢に、義経の身代わりとなり、討ち死にをした兄・継信は、稀代の忠臣として死んで、初音の鼓に張られた皮が親狐のもので、鼓の音がする度に、狐の部分が出てしまう源九郎狐。その狐らしい仕草に早見の藤太がやつて来ます。

可笑しみのあるセリフや所作がある道化役ですが、手柄を立てようと二人に挑みます。忠信は軽くあしらい、静御前と共に義経のもとへと急ぎます。この忠信、実は狐が化けたもので、初音の鼓に張られた皮が親狐のもので、鼓の音がする度に、狐の部分が出てしまう源九郎狐。その狐らしい仕草にご注目ください。

